

巻 頭 言

近年の一般的な水に関する国際議論の興隆と ICID

ICID 日本国内委員会 委員長 中村 良太

先日のこと、私のところに一通のアンケートが送られて来た。水に関する最近のメガ・カンファレンス（世界水フォーラムなどの一連の超大型の国際会議）についてどう思うか、というものである。送り主は A.K.ピスワス氏である。彼は水の専門家の中では世界的な大物である。彼は水に関する世界の議論の動向にはきわめて敏感な人で、たとえば、彼の最近の著書で「イスラム社会の水」というのがある。今回のアンケートでも、彼はまたこの結果を使って次の本を書くのであろう。私は苦笑しながら次のような答を書いた。

すなわち、水に関する国際的であつ一般的な議論は、昔から存在していたが、それは主として国際機関の人々によって、独占的になされていた。最近のメガ・カンファレンスによって、多くの人々にこの議論に参加できる道が開かれてきたことは高く評価される、と。

実際、私には次のような経験がある。私がまだ若い頃のことである。日本にもいろいろな国際機関の人の来訪があり、しばしばその話を聞くことがあった。意外に感じたのは、そのいろいろな国際機関の人々が皆、言い合わせたように同じことをいうことである。たとえば世銀の人が来て言っていたと思うと、次に来た FAO の人も同じ事をいう、といった具合である。この内容が、時代によって次々と変化する。ICID 関係に限って一例を挙げれば、私が知る限りでの最初の時代には、途上国でダムなどの大型構造物ばかり造られて末端の整備が進まない弊害について、盛んにいわれていたことがある。次の時代には、灌漑が塩類集積の原因となることがいわれていたこともある。これらから明らかなのは、少なくとも、つねに外国を旅行していろいろな国の人々と議論ができる国際機関の人々の間においては、各専門分野の中では、国際的議論とでも呼ぶべきものが存在していたことである。

かつての時代は以上のようなようであるが、それが 1990 年代になって、事情が変わってきた。1992 年の「水と環境に関する国際会議（いわゆるダブリン会議）」を始まりとして、それ以降、幾つもの専門領域を合わせた大型の水に関する国際会議が、少なくとも 2 ～ 3 年に 1 回のペースで開かれるようになってきた。中でも、1996 年は水関係者にとって特筆すべき年である。この年に、種々の専門分野に分かれている各種の水関係国際組織を総合的に取りまとめようとする組織が二つ、すなわち GWP（世界水パートナーシップ）と WWC（世界水会議）が、同時にできた。どちらかという、GWP が事業の実施面を、WWC がポリシー面を、それぞれ担当する。ご承知のように 2003 年に京都で「世界水フォーラム」という 5000 人余りを集める水全般を扱う大会議が開かれたが、これは後者の WWC の主催で 3 年に一回開かれるものの第 3 回であった。

この世界水フォーラムは日本にとっても大きな出来事であり、わが国の農業土木分野でもこれに備えて数年も前から情報収集が開始された。私個人についていえば、この情報収集係りの一人に起用していただき、いくつかの国際会議に出席した。第 2 回の世界水フォーラムは 2000 年にオランダで開かれ、これにおいては、「水ビジョン」と称する文章が起案され、この文章作成に向けての幾つかの国際会議が行なわれた。ICID でも、このためのワークショップがマレーシアで開かれた。それ以外にも、やはり大規模な会議として毎年スウェーデン政府の主催で開かれる「ストックホルム水シンポジウム」

があり、これも世界水フォーラムに向けてという流れの中で行なわれていた。さらに、IWMI（国際水管理研究所）の主催する水フォーラムに関連しての「水、食料、環境に関する対話」という運動があり、これには ICID も一員として参加して、何回か会議が開かれた。これらすべての会議の中で、ICID は全般的に大勢力であり、大きな影響力を持つ。

これらの会議では、多岐にわたる専門分野からの人々の集まりであれば、議論は拡散的で、むだな議論も多い。しかし幾つか続けて出て見ていると、いろいろな専門分野から出席する人々の中でも何人か常連がいることが分かってくる。彼らはつねにすべての会議に参加するわけではないが、何人かは代わり合ってつぎつぎとこれらの会議に出席し、結果的に、テーマはその時々で変化するにもかかわらず、何パーセントかの共通基礎の内容は次につながって持ち越される。

その中で、どうしても誰にも否定のしようのない基本的な事実、あるいは議論は、徐々に残って積み重ねられていき、彼らの間での常識の一つの流れを作る。たとえば、「世界での水使用のもっとも大きな部分は農業用水によって占められている」ことなどが、その例で、最初には新しいことのようにいわれていたが、今ではすっかり共通常識になっている。これらの人々の間で、ある種の単語に関するイメージが別々なのが、徐々に統一されることも重要である。たとえば現在、「参加」という言葉は、住民参加とか農民参加という形で何回も聞かれるが、それでイメージされているものは、かなり人によって差がある。が、これもそのうち、共通に統一されて来るのではないだろうか。

このような形で、徐々にではあるが、国際的な水に関する世論のようなものが形成される。前にも記したように、これが以前はいろいろな国際会議に常に出席している国際機関の人々に独占されていた。これが、メガ・カンファレンスのおかげで、いろいろな人々がこの議論に参加できるようになった。参加できないにしても、少なくとも、大勢の人々に対してオープンに議論の内容が示されるようになった。その結果、この国際的議論はかつてなく影響力を増加している。これは注目すべき一つの変化である。

多分に世界水フォーラムの開催に触発されて、わが国においても、農業土木の領域に止まらず、幾つかの専門領域において世界的な議論に対して影響を与えようとする組織的な試みが現在行なわれつつあるのは、周知のとおりである。これには、今までの日本の農業用水の歴史ではなかったことで、現在関係しておられる方々のご苦労も大きい。日本が世界に向けて開かれてくる証として、注目に値する。ICID 本部においても、世界水フォーラムに向けて世界に発信するための幾つかのタスク・フォースが設立された。これにより、積極的な対応が開始され、その専門領域から外界への繋がりを強めている。

一つの国、あるいは一つの専門領域での ICID のような国際組織のポリシーが徐々に外に向かって発信され、国際的な一般議論に影響が及ぶ。これはあたかも上流から放流された水が下流に到達するような具合である。水路で水を上流から放流する場合は、最下流の状況をよく見てその需要に対して過不足なく届くように放流する必要がある。

国際的な議論の場に向けて発信する場合でも、上に述べたように国際的な議論の場では、それなりの共通の認識あるいは言葉のようなものがある。その最下流的な国際的議論の変化の状況をよく理解し、その時々世界的議論上で必要とされる事項と関連するスタンスで発言をすれば、発言の影響力は一段と強められる。我々日本国も、また ICID 本部においても、この点にはさらなる努力が必要かもしれない。とくに日本については、そのような国際議論の状況を十分に理解できる若い人々を、今後さらに何人増加して養成できるかに、将来の影響力の増加が懸かっているように感じる。